

「反視覚中心主義」と「視覚中心主義」の“あいだ”で ——『うつむく眼』を手がかりとしたニーチェ思想をめぐる一考察¹⁾——

田邊 正俊*

1. はじめに

マーティン・ジェイの大著『うつむく眼』は、主として20世紀のフランスにおいて展開された「反視覚中心主義」について——その“行き過ぎ”に対する疑問も表明しつつ——論じることを主眼においた大著である。論者は『うつむく眼』の訳者の一人として、「反視覚中心主義」の“ひとつの”重大な背景となったニーチェについて、ひとつの問いを立てたうえで、それに答えていくことを、本稿において試みてみたい。その問いとは、「ニーチェは反視覚中心主義の先駆者であったのか、それとも視覚中心主義の残滓にとらわれていたのか」というものである。

この問いに答えるために、まず、第2節において、ニーチェにおける「反視覚中心主義」的な側面について確認する。続いて、第3節において、ニーチェにおける「視覚中心主義」的な側面について確認する。

結論を先取りしておく、ニーチェには一方で確かに「反視覚中心主義の先駆者」としての側面がある。しかし、**それと同時に**、「視覚中心主義の残滓にとらわれている」という側面もある。言いかえるならば、ニーチェが視覚の思想史において占める位置は、「**反視覚中心主義と視覚中心主義の“あいだ”**」ということになる。本稿においては、このようなニーチェの“二面性”について確認することで、『うつむく眼』において展開される議論に分け入る際のひとつの手がかりを提示することも、あわせて試みてみたい。

* 立命館大学文学部非常勤講師

2. ニーチェにおける「反視覚中心主義」的な側面

『うつむく眼』において詳細に論じられているように、近代から現代にかけて西洋——さらには、西洋思想の影響を受けた世界各地（日本もその例外では“ない”）——を支配した「視覚中心主義」、ジェイによるならば「デカルト的遠近法主義」（Cartesian perspectivalism）²⁾においては、「身体の眼」以上に「精神〔魂〕の眼」が重視されてきた。「デカルト的遠近法主義」とは、“唯一の”静止した眼——そのあり方は、「身体の眼」とは著しく異なっている——が凝視するところに成立する“唯一の”ペルスペクティヴ（視点・観点・見方）³⁾を前提とする視覚体制である⁴⁾。これは、「〔唯一の静止した〕精神の眼」を「〔二つの絶えず動き回る〕身体の眼」よりも上位に位置づけることによって、はじめて成立するものである。このような視覚体制を哲学的に確立したのはデカルトであるが、淵源としてはプラトンに遡ることができる。プラトンは「身体の眼」に信頼をおかなかった一方で、正しく活用すれば真理をみてとることができる「精神の眼」——知性・理性——に大きな信頼を寄せていた⁵⁾。そして、この「精神の眼」に対する信頼は、身体よりも精神に高い価値をおくという点でプラトン哲学と共通するキリスト教と結びついて、西洋を長きにわたり支配してきたのである。

他方で、プラトニズム（プラトン主義哲学）とキリスト教の枠組みをニーチェが厳しく批判したことは、すでに広く知られている通りである。ニーチェにとって、「精神の眼」はいかなる特権的な地位をも占めるものではない。

ニーチェによる「精神の眼」に対する直接的な批判としては、「全くもって考えられないような眼」（ein Auge, das gar nicht gedacht werden kann）を挙げることができる。これは、「全く方向をもたず、何かを見るための能動的で解釈する力（Kraft）を差し止められ、そのような力を欠いている眼」と

位置づけられる⁶⁾。この「考えられない眼」の根底には「純粹で、意志を欠いて、痛みを感じない、時間を越えた認識主観」⁷⁾——デカルト的な“コギト”——がある。「精神の眼」と、その根底にある「身体から切り離されて、時間に拘束されない認識主観」への批判は、視覚中心主義の伝統において重視されてきた知性や理性に対する批判にもつながっていく。それらが西洋哲学の伝統において占めてきた“不当に高い地位”を否定することを、ニーチェは「あらゆる価値の価値転換」として遂行してきた。たとえば、『ツァラトゥストラかく語りき』において、ニーチェは以下のように論じている。

わたしはどこまでも身体（Leib）であり、それ以外の何ものでもない。そして魂（Seele）とは、**身体に付随する何ものか**をあらわす言葉でしかない。

身体はひとつの大きいなる理性である。なんらかの意味をもった多様なものである。戦争であるとともに平和でもある。畜群であるとともに牧人でもある。

あなたが「**精神**」（Geist）と名づけているあなたのちっぽけな理性も、**あなたの身体の道具にすぎないのだ**、わが兄弟よ。あなたの大きいなる理性〔＝身体〕のちっぽけな道具でありおもちゃであるにすぎないのだ⁸⁾。

ここでは明らかに、生き生きとした身体・肉体（Leib）——これが物体としての身体（Körper）とは異なることは、両者の区別を単語レベルで前提とすることができない英語訳や日本語訳では十分に伝わらないおそれがある——が、精神よりも上位に位置づけられている。Leib は Leben（生）と同根の語であり、ニーチェはここで、意識的に Leib を用いている。ニーチェによれば、理性は「身体の道具」であって、逆ではない。ここでは、デカルト哲学——身体は理性によって完全に制御される“精巧な機械”でしかない——からの反転（価値の転換）が生じている。

また、ニーチェが「仲介感覚」(der Mittler-Sinn)と位置づけられる味覚⁹⁾や、「ことばのにおい」¹⁰⁾を嗅ぎとる嗅覚を重視していることも、注目に値する¹¹⁾。さらに、ニーチェは『この人を見よ』において、食事や作法のあり方についての自説や、土地と風土についての自説を開陳している。このような議論は視覚中心主義のもとで可能になるものではない。身体全体をもって世界に入り込む——あるいは、身体全体が世界に巻き込まれる——ことによって、はじめて可能になるものである。

ニーチェが身体的不調——主に、極度の近視、偏頭痛、発作等に苦しめられた——のゆえに(在職期間わずか10年にして)バーゼル大学を34歳のときに退職し、その後約10年にわたって、夏には主にスイス、冬には南欧を規則的に行き来する「渡り鳥」(der Wanderer)としての生涯を送ったことは、よく知られているとおりである。ところが、そうしてヨーロッパを規則的に“旅”したニーチェには、その芸術への高い関心からすると意外なことに、「絵画を見にいった」という記録がほとんど残されていない¹²⁾。また、絵を描くことに積極的に取り組んだというエピソードも、管見の限りほとんど見受けられない¹³⁾。もちろん、極度の近視——“身体的な制約”——のゆえに、ニーチェは絵画に親しむことができなかったという側面もあるだろう。それにしても、ニーチェが関心を抱いた「芸術」とは、まずもって音楽であり、さらには音楽と文学の融合ともいえる古代ギリシアの悲劇であった。

このような検討を踏まえると、ニーチェが視覚——精神の眼によるもののみならず、身体の眼によるものも含めて——のみをことさらに特権視していたとはいえないであろう。

3. ニーチェにおける「視覚中心主義」的な側面

前節で確認してきたように、ニーチェは精神が優位を占めるプラトニズム・キリスト教の伝統に異を唱え、身体を精神よりも上位にあるものと位置

づけた。このことは、視覚中心主義への批判という一面を確かに有している。

他方で、ニーチェが“全面的・徹底的”に反視覚中心主義の立場に立っていたかという点、必ずしもそのようには言い切れない。本節においては、「ペルスペクティヴィスムス」(Perspektivismus)と「光学」(Optik)についてのニーチェの思想を主な手がかりにして、このことを確認していきたい。

ニーチェは、晩年の遺稿断片において、「ペルスペクティヴィスムス」を以下のように定義している。

そもそも「認識」という語に意味がある限りで、世界を認識することができる。しかし、世界は別様にも解釈することができる (deutbar) のであり、世界はみずからの背後にいかなる意味ももたない。そうではなく、世界は無数の意味をもつのである。——ペルスペクティヴィスムス¹⁴⁾。

この断片からも明らかなように、ニーチェにとって「ペルスペクティヴィスムス」とは、**まずもって認識論的な概念である**。ニーチェの「ペルスペクティヴィスムス」が認識論へと**拡張されていること**については、ジェイも『うつむく眼』において、以下のように指摘している。

ニーチェは『善悪の彼岸』や『悦ばしき知識』といった著作では、認識にかかわる論点にも規範にかかわる論点にもパースペクティヴィズム〔ペルスペクティヴィスムス〕を適用することになる¹⁵⁾。

他方で、「ペルスペクティヴィスムス」は、その起源に絵画技法としての遠近法 (Perspektive) を有しており、それから完全に切り離されることがないということも**否定できない**。「遠近法」がルネサンス期に成立した絵画技法であり、それが近代の視覚体制に決定的な影響を与えた事情については、

アルベルティへの言及を交えながら、『うつむく眼』においても確認されているとおりである¹⁶⁾。「遠近法」は、単なる絵画技法にとどまらなかった。すなわち、「眼に見える現実の世界——三次元的な世界——を、キャンバス上——二次元的な世界——に正確に反映する」ところから転じて、「客観的・普遍的な真理を正確にとらえる」という意味をも、遠近法は担うことになったのである。

このような変遷の延長上で、哲学におけるペルスペクティヴィスムスは展開された。これまでの研究史——これは、ジェイも『うつむく眼』において踏襲しているものである¹⁷⁾——において通説になっているように、ニーチェのペルスペクティヴィスムスは絵画への関心からもたらされたものではなく、ライプニッツやタイヒミュラー¹⁸⁾によって哲学へと導入され、認識論的な概念へと拡張されたそれを承けて主張されたものである¹⁹⁾。その出発点においては徹頭徹尾「身体の眼」にかかわるものであったはずのペルスペクティヴ／ペルスペクティヴィスムスが、「精神の眼」にまでも適用されるようになったという近代以降の大きな変化のなかに、ニーチェもまた“巻き込まれていた”のである。

実際に、ニーチェ自身がペルスペクティヴを「見ること」(Sicht)と直結させていることもある。その典型となるのが、『道徳の系譜』第三論文の一節である。

ペルスペクティヴ的に見ること、ペルスペクティヴ的な「認識」だけがある。しかるにわれわれがひとつの事物に対してより多くの眼、さまざまな眼を向けることができればできるほど、それだけその事物についてのわれわれの「概念」、われわれの「客観性」はより完璧となるであろう²⁰⁾。

もちろん、「認識」や「概念」や「客観性」が引用符で囲まれていること

を見落としてはならない。そもそも、この箇所における「ペルスpekティヴ的に見ること」は、前節で指摘した「考えられない眼」を前提としている。引用符で囲まれた「認識」や「概念」や「客観性」といった語は、(プラトニズムの系譜上にある)近代哲学で重視されたものであり、ニーチェはそれらに高い価値をおくことはない。むしろ、プラトニズムの系譜において重視された「認識」や「概念」や「客観性」もまた、ペルスpekティヴ的に見ることによってしか可能にならないことを、ニーチェはここで指摘しているのである。とはいえ、たとえ批判的なニュアンスによる言及であるとしても、ペルスpekティヴがあくまでも視覚的なものであり、視覚中心主義の歴史のなかでしか“成立し得なかった”ことをニーチェは認めているのである。

さらに、ニーチェが視覚中心主義の残滓にとらわれていたことを傍証する事実として、「光学」(Optik)への度重なる言及を挙げることもできる。

ニーチェが言及する「光学」としてよく知られているのは、「病者の光学」(Kranken-Optik)や「生の光学」(Optik des Lebens)である。

前述のように、ニーチェは極度の近視や度重なる偏頭痛・発作に生涯苦しめられ、視覚的な意味も含めて決して健康に恵まれなかった。他方で、ニーチェは病を経験したからこそ、「より健康な概念と価値」を獲得するとともに、「生を新たに発見する」こともできたと回顧する²¹⁾。このような「病者ならではの見方」を、ニーチェは「病者の光学」と表現している。

また、ニーチェにとっては「生」と「光学」は不可分のものである。たとえば、「生のペルスpekティヴ的な光学」(die Perspektiven-Optik des Lebens)という直接的な表現を、『善悪の彼岸』において見出すことができる²²⁾。ただし、『善悪の彼岸』の該当箇所では、その内実について語られることはなく、後年の『偶像の黄昏』において、「[生の光学のもとで]われわれは価値について論じる」²³⁾と、改めて定義されることになる。すなわち、「生を昂進させるものは価値が高く、生を貶めるものは価値が低い」——これは、プ

ラトニズムやキリスト教の価値基準から“反転”した価値基準である——というニーチェの見方〔あらゆる価値の価値転換〕を可能にするものが「生の光学」なのである。

これらの言及からうかがえるように、ニーチェは「光学」を「ペルスペクティヴ」と同じような意味で用いている²⁴⁾。そうであるならば、「ペルスペクティヴ」の場合と同様に、「光学」もまた「視点・観点・見方」といった広範な含意を有していることになり、決して視覚的な意味だけに限定されないという見方も一面では可能であろう。

それでも、「ペルスペクティヴ」の場合と同様に、「光学」もまた、視覚から完全に切り離されたものではあり得ない。視覚中心主義の歴史のなかではじめて、「ペルスペクティヴ／ペルスペクティヴィスムス」も「光学」も可能になったのである。そもそも、視点 (viewpoint / Gesichtspunkt) や 観点 (point of view / Gesichtspunkt)、見方 (viewpoint / Ansicht) といった視覚を前提とする表現をニーチェが多用すること自体が、彼の哲学に残される**視覚中心主義の残滓**であるとみなすこともできる。

このような検討を踏まえると、ニーチェがたとえ——主に、「精神の眼」の特権視を批判することを通じて——反視覚中心主義の先駆であろうとしたとしても、どうしても“視覚”の残滓がその思想には残らざるを得ないことになる。ジェイもまた、「ニーチェの徹底的な遠近法主義^{パースペクティヴィズム}は結局のところ、どれだけ部分的にであれ、視覚が介在することはどうしても避けられないということを含意していた」と指摘している²⁵⁾。視覚そのものにペルスペクティヴィスムスを適用して、**単一の視覚——精神の眼による視覚——**に対してニーチェが“反対した”ことを受け入れる²⁶⁾としても、そのことに変わりはないのである。

4. おわりに

本稿を通じて確認してきたように、ニーチェには「反視覚中心主義の先駆者」という側面が一方にはある。他方で、ニーチェには「視覚中心主義の残滓にとらわれている」という側面も同時にある。ジェイは、ニーチェではなくベルクソンこそが、視覚中心主義の真の批判者であるとみなしている。

ベルクソンは、パースペクティヴィズム〔ペルスペクティヴィスムス〕に含まれる視覚の残滓を越えて、ニーチェのなした批判すらもはるかに凌駕する、視覚中心主義への根本的な批判を展開した²⁷⁾。

このことは、ニーチェが「精神の眼」の覇権を否定することを通じて、それまでの西洋を支配していた「視覚を頂点とする感覚のヒエラルキー」を批判したという事実——これは、サラ・コフマンが『ニーチェとメタファー』において指摘していることでもあり、ジェイもこの指摘に注意を促している²⁸⁾——にもかかわらず、いえることなのである。ジェイが論じるように、反視覚中心主義の歴史にとって、ニーチェはあくまでも“過渡的”な存在であるという見方も、十分に成り立つものであろう。

それでも、たとえ過渡的なものであったとしても、視覚中心主義への批判——とりわけ、「精神の眼」への徹底的な批判——を展開したニーチェが、反視覚中心主義にとって大きな役割を果たしたことは事実である。そして、ニーチェと視覚論のかかわりに足を踏み入れることは、反視覚中心主義について考察するための第一歩であると同時に、『うつむく眼』の議論に足を踏み入れるための第一歩にもなるであろう。

本稿が、『うつむく眼』の議論に足を踏み入れるための一助となるのであれば、論者としては望外のよろこびである。

【注】

- 1) 本稿は、(取りあげるテーマが重なる) 以下の拙論と重なる内容を含んでいることを、予めお断りしておく。本稿に興味を抱く方におかれては、あわせてご一読いただけると幸いである。

田邊正俊、「ニーチェと視覚をめぐる一考察——デカルト的遠近法主義とペルスベクティヴィスムを手がかりとして——」(立命館大学人文科学研究所編、『立命館大学人文科学研究所紀要』、第108号、2016年、39-64頁所収。URL http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hss/book/pdf/no108_04.pdf (2018年7月30日確認))。

- 2) ただし、ジェイは西洋近代の視覚体制として、「デカルト的遠近法主義」に加えて、「オランダの描写術」と「バロックの視覚体制」も挙げている。『うつむく眼』の第一章(『うつむく眼』、42頁以降(DE, pp. 45ff.)) 参照。
- 3) Perspektive は「遠近法」、Perspektivismus は「遠近法主義」と訳されることが多い。他方で、これらの語を「遠近法」や「遠近法主義」と訳すことによって、絵画技法としての遠近法との関係性が必要以上に強調されすぎるおそれがある。しかし、ニーチェに限らず、哲学においては Perspektive が「認識論的な概念」として用いられることが多い(そのことは、ライプニッツやタイヒミュラーの哲学を想起すれば容易に理解できるであろう)。

このような事情を踏まえて、本稿においては、Perspektive / Perspektivismus をあえて日本語に訳出せずに、カタカナで表記している場合がある。

- 4) 『うつむく眼』、(228) 頁(序論訳註1、第1章訳註1) 参照。また、ジェイ自身のより詳細な説明としては、以下を参照。Martin Jay, Scopic regimes in modernity, in: Hal Foster (ed.), *Vision and Visuality — Discussions in Contemporary Culture*, New Press, 1999 (First published, in 1988), pp. 3-27. (樽沼範久訳、「近代性における複数の『視の制度』」(ハル・フォスター編、『視覚論』(平凡社ライブラリー、2007年) 所収)、21-52頁)。
- 5) 『うつむく眼』、25頁(DE, p. 26) 参照。
- 6) Nietzsche, *Zur Genealogie der Moral*, Dritte Abhandlung: was bedeuten asketische Ideale?, Sektion12, KSA5, S. 365 (信太正三訳、『道徳の系譜』、第三論文「禁欲主義的理想は何を意味するか?」12節、ちくま学芸文庫版ニーチェ全集第11巻、520頁)。
- 7) Ibid (同上)。
- 8) Nietzsche, *Also sprach Zarathustra*, Erster Teil, Von den Verächtern des Leibes, KSA4, S. 39 (氷上英廣訳、『ツァラトゥストラはこう言った』上巻(岩波文庫、1967年)、第一部「身体の軽蔑者」、51頁)。
- 9) Vgl. Nietzsche, *Menschliches Allzumenschliches, Zweiter Band, Der Wanderer und sein Schatten*, Nr. 102, KSA2, S. 597 (中島義生訳、『人間的、あまりに人間的』第二巻、『漂泊者とその影』、アフォリズム102番、ちくま学芸文庫版ニーチェ全集第6巻、

348 頁参照)。

- 10) Vgl. *Der Wanderer und sein Schatten*, Nr. 119, KSA2, S. 604 (『漂泊者とその影』、アフォリズム 119 番、前掲邦訳、359 頁参照)。
- 11) 視覚と味覚や嗅覚を等置するニーチェの考え方については、サラ・コフマンが『ニーチェとメタファー』においてすでに注目している。以下の文献を参照。
サラ・コフマン (宇田川博訳)、『ニーチェとメタファー』(朝日出版社、1986 年)、180-183 頁。
- 12) Vgl. M. Montinari, *Chronik zu Nietzsches Leben*, KSA15, S. 7-212 (氷上英廣訳、「ニーチェ生活記録」、白水社版ニーチェ全集第Ⅱ期第 12 巻、195-479 頁所収)。
なお、ニーチェが絵画を見るために美術館に行った記録は残されていない一方で、1877 年に、マイゼンブーク、ブレンナー、パウル・レーらとともにナポリの博物館〔国立考古学博物館：ギリシア彫刻とフレスコ画のコレクションで知られる〕を訪れ、ニーチェが歓喜したという記録が残されている (Vgl. *Chronik zu Nietzsches Leben*, KSA15, S. 72 (「ニーチェ生活記録」、前掲邦訳、282 頁))。この記録によると、その際にニーチェが強い関心を示した陳列品は、〔ギリシア古代の研究に資する〕**古代ギリシアの造形芸術 (彫刻など) のようであり**、フレスコ画に対する言及は見受けられない。
- 13) 他方で、例外的な事実として、(1889 年 1 月の) 発狂直後にニーチェ自身が描いた絵の存在を挙げることができる。これは、1882 年にニーチェがルー・ザロメに結婚を申し込んだルツェルンのライオン記念碑を描いているとされる (清水真木、『ニーチェ入門』(ちくま学芸文庫、2018 年)、76-77 頁参照)。
- 14) Nietzsche, *Nachgelassene Fragmente*, Ende 1886 - Frühjahr 1887 7 [60], KSA12, S. 315 (三島憲一訳、「遺された断想」1886 年末 - 1887 年春 7 [60]、白水社版ニーチェ全集第Ⅱ期第 9 巻、397 頁)。
- 15) 『うつむく眼』、165 頁 (DE, p. 188)。
- 16) 『うつむく眼』、47 頁以下 (DE, pp. 51ff.) 参照。
- 17) 『うつむく眼』、164-165 頁 (DE, p. 188) 参照。
- 18) タイヒミュラー (Gustav Teichmüller (1832-1888)) は、ニーチェがバーゼル大学に古典文献学教授として赴任した際に、同大学の哲学教授を務めていた哲学者である。ニーチェは彼の『現実の世界と仮象の世界』(*Die wirkliche und die scheinbare Welt*) を読み、そこから一定の影響を受けている。この事情については、以下の論考を参照。中澤武、「ニーチェとタイヒミュラー——「遠近法主義」の問題——」(中原道郎・新田章編、『ニーチェ解説』(早稲田大学出版部、1992 年)、143-163 頁所収)。
- 19) ただし、ライブニッツやタイヒミュラーの論じる「ペルスペクティヴ／ペルスペクティヴィスム」がニーチェに影響を与えたことを**必要以上に強調しすぎる**ことに對しては、論者は否定的である。

確かに、ライブニッツもタイヒミュラーも、「ペルスペクティヴの複数性」という点

ではニーチェと共通している。しかし、彼らの場合は、ペルスペクティヴ相互間の優劣——位階秩序(Rangordnung)の違い——が出されていない。また、ライプニッツの場合、ペルスペクティヴを通じて映し出される事象・事物は「ひとつ」であり——『モナドロジー』で挙げられているのが「同一の」都市の異なった眺望であることを想起する必要がある——、タイヒミュラーの場合は「唯一の確実な自我主観」を起点としたペルスペクティヴが想定されている。とりわけ、**タイヒミュラーのペルスペクティヴィスムは、アルベルティ的な遠近法～デカルト的遠近法主義のあり方に通じている**。なお、ジェイは『うつむく眼』において、アルベルティ的な遠近法とデカルト的遠近法主義が、同じ想定にもとづいて成立している事情について指摘している(『うつむく眼』、165頁(DE, pp. 188-189) 参照)。

- 20) *Zur Genealogie der Moral*, Dritte Abhandlung, Sektion 12, KSA5, S. 365 (『道徳の系譜』、前掲邦訳、520頁)。
 - 21) Vgl. Nietzsche, *Ecce homo*, Warum ich so weise bin, Sektion 1-2, KSA6, S. 266-267 (川原栄峰訳、『この人を見よ』、「なぜ私はこんなに賢明なのか」1-2節、ちくま学芸文庫版ニーチェ全集第15巻、24-25頁参照)。
 - 22) Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, Nr. 11, KSA5, S. 26 (信太正三訳、『善悪の彼岸』、アフォリズム11番、ちくま学芸文庫版ニーチェ全集第11巻、33頁)。
 - 23) Vgl. Nietzsche, *Götzen Dämmerung*, Moral als Widenatur Sektion 5, KSA6, S. 86 (原佑訳、『偶像の黄昏』、「反自然としての道徳」5節、ちくま学芸文庫版ニーチェ全集第14巻、53頁参照)。
 - 24) したがって、Optik が他の言語に訳される際に「遠近法」(に相当する語) が用いられることは、ゆえなきことではない。実際に、前述の「病者の光学」(Kranken-Optik) を *sick perspective* と訳している英語訳も存在する(Cf. Nietzsche (tr.: T. Wayne), *Ecce homo*, 'Why I am so clever', Section 1, Algora publishing, 2004, p. 13)。
 - 25) 『うつむく眼』、177頁(DE, p. 201)、強調引用者。
 - 26) 『うつむく眼』、165頁(DE, p. 188) 参照。
 - 27) 『うつむく眼』、168頁(DE, p. 192)。
 - 28) コフマンは『ニーチェとメタファー』において、「感覚同士のこうした階層関係〔= 視覚が特権化され、味覚や嗅覚が認識の領野から締め出され抑圧されるという関係〕は消滅する」と論じている(『ニーチェとメタファー』、180頁参照)。ただし、コフマンの議論は、「ニーチェにとって、眼は一つの嗅覚でもあれば、味覚、聴覚、触覚でもある」と続く(同書、180-181頁参照)。コフマンは「眼」に焦点を当てる議論を展開しているが、論者としてはこれを「**身体全体**」と関係づける方が適切なのではないかと考える(要するに、**身体**の特定の部分だけが“特権化”されるのではないのである)。
- なお、ジェイによるコフマンの議論への注目については、『うつむく眼』の(198頁(第9章原註66))において見出される(Cf. DE, p. 511, Chap. 9, note. 66)。

【凡例】

引用に際して、原典のゲシュベルトによる強調は、[、]傍点により表記した。ゴシック体による表記は、引用者による強調である。

ニーチェの著作からの引用は、以下の全集によった。

F. Nietzsche, *Sämtliche Werke*, G. Colli und M. Montinari (Hrsg.), Kritische Studienausgabe, dtv / de Gruyter, Neuausgabe, 1999.

同全集からの引用に際しては、(KSA 巻数, 頁数) と表記した。

また、引用に際して、邦訳のある場合は邦訳を参照しているが、訳文自体は引用者によるものである。なお、読者の便宜を考慮して、参照した邦訳についても併記している（ちくま学芸文庫版全集と白水社版全集に多くを負っているが、『ツアラトゥストラかく語りき』については岩波文庫版を参照している）。

ジェイの『うつむく眼』（Martin Jay, *Downcast Eyes —The Denigration of Vision in Twentieth-Century French Thought* (University of California Press, 1993)）からの引用に際しては、原則として邦訳（亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳、『うつむく眼——二〇世紀フランス思想における視覚の失墜』（法政大学出版局、2017年））にもとづいている。また、原書の頁数についても、DE の略号の後に併記している。

【謝辞】

本稿執筆・公開の機会を与えてくださったマーティン・ジェイ先生、谷徹先生、加國尚志先生、『うつむく眼』共訳者の先生方に、この場をお借りして深く御礼申し上げたい。

また、ワークショップ当日にご参加くださったみなさま、ご質問くださった会場のみなさまにも、あわせて御礼申し上げたい。

本稿は、JSPS 科研費 26284007（「間文化性の理論的・実践的探求——間文化現象学の新展開」、研究代表者・加國尚志（立命館大学文学部教授））による研究成果の一部である。

